

平成 30 年 6 月 2 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25282119

研究課題名(和文) 東日本大震災におけるコミュニティ復興のアクションリサーチ

研究課題名(英文) Action Research for Community Recovery from the Great East Japan Earthquake

研究代表者

渥美 公秀 (Atsumi, Tomohide)

大阪大学・人間科学研究科・教授

研究者番号：80260644

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,900,000円

研究成果の概要(和文)：東日本大震災で被災した3つのコミュニティで地域資源に着目したフィールドワークを展開し、コミュニティ復興に向けた地域資源プラットフォームを構築して、復興教育プログラムを展開した。具体的には、岩手県野田村、宮城県南三陸町、同気仙沼市において、NPOなど地元の諸団体、学校、宗教施設に注目して、復興に向けた協働的实践を長期的に展開し、地元諸団体の活性化、学校避難所の記録、宗教施設の機能の把握を介したアクションリサーチを展開した。結果をもとに、野田村をモデル地区に選定し、地域資源プラットフォームとしてコミュニティFM開局準備会に焦点を当て、地元教育機関等と連携して復興教育プログラムを試行した。

研究成果の概要(英文)：We conducted a series of fieldwork in three communities - Noda Village, Iwate Prefecture, Minamisanriku Town and Kesenuma City, Miyagi Prefecture, devastatingly damaged by the Great East Japan Earthquake, and provided a disaster-recovery education program based on our "Community Recovery Platform". We focused on various local organizations/associations including non-profit organizations, schools, and religious institutions in each community and conducted long-term collaborative practices with local residents related to those organizations. While these practices changed into action research, we appointed Noda Village as our principal area for the platform. Finally, we focused on a local association preparing for community FM radio station as our Community Recovery Platform, and implemented a trial educational program for community recovery collaborated with local schools.

研究分野：災害社会心理学

キーワード：コミュニティ 復興 地域資源 アクションリサーチ

1. 研究開始当初の背景

災害復興過程に関する国内外の人文・社会科学的研究は、いくつかの例外を除いて、十分に行われてきたとは言い難い(渥美,2012;Passerini,2000;Tierney,2007)。災害時の地域資源として、災害NPOについては、阪神・淡路大震災以来の動向が報告され(Atsumi & Goltz, 2014)、新潟県中越地震以来注目を浴びてきた復興過程についてもようやく本格的な研究(e.g.,宮本・渥美・矢守,2012)が報告されてきているというのが現状であった。学校組織は、避難所指定や避難訓練などで災害の文脈に位置づけられることはあっても、コミュニティ復興との関わりで十分に論じられては来なかった。さらに、宗教施設は、人々の「無自覚な宗教性」(稲場,2011)を育てきたし、実際には、天理教ひのきしん隊や真如苑 SeRV など災害救援に多大な貢献をしてきた事例もあるが、コミュニティ復興という文脈でその機能が論じられることはなかった。また、地域資源がソーシャルキャピタルを創出する源泉として位置づけられることもあるが、ソーシャルキャピタル研究は、概念が多様化し、社会調査による実態把握に終始しているのが現状であった。従って、コミュニティ復興に向けた地域資源間の連携に関する研究や実践は、事実上、皆無と言うのが研究開始当初の研究上の背景であった。

東日本大震災・津波の発災直後から、研究代表者と2名の研究分担者(志水・稲場)は、それぞれに被災地において救援活動に参加しながら、各々の学術的背景に基づいた研究活動を展開した。3名は、学内での研究会を重ねて綿密な連携をもった研究チームを結成し、2011年度、2012年度にわたり、学内競争的資金を獲得して、研究活動を展開してきた。中間的な成果は、それぞれが論文等にして公刊するとともに、学内での研究報告会を複数回開催し、さらに、所属研究科主催のシンポジウムに結実した。ただし、これは発災からの最初の2年間という復興過程全体から見れば極めて短期的な研究成果であり、しかも、所属機関内の研究者の参加に限定されていたために、研究の長期的拡充には限界があった。

そこで、本申請により、長期的な研究資金を得て、研究チームを拡大深化させ、東日本大震災の復興に対する研究者としての貢献を深め、さらに、今後予想される巨大災害にむけた社会安全システムとしての地域資源ネットワークの構築と教育プログラムの実践を現実化したいと、本研究を着想した。

2. 研究の目的

本研究は、東日本大震災・津波で被災したコミュニティで地域資源に着目したフィールドワークを展開し、「コミュニティ復興に向けた地域資源プラットフォーム」に関する実践的提言を行い、モデル地区で試行し、教

育実践へと昇華して災害に対する社会安全に寄与することを目的とした。

具体的には、以下の4点を目指して研究を実施した。

(1) 3つの被災コミュニティにおいて、地域資源(NPO,学校、宗教施設)に注目した参与観察を行って地域資源の連携がコミュニティの復興に果たす機能を明らかにする。

(2) 地域資源の連携とコミュニティ復興に関する理論を精緻化しコミュニティ復興を目指すアクションリサーチを展開する。

(3) コミュニティ復興に向けた地域資源プラットフォームに関する実践的提言を行いモデル地区で試行する。

(4) 成果に基づく復興教育プログラムを開発・実践する。

3. 研究の方法

本研究では、現場研究を協働的实践とアクションリサーチに分類した。前者は、後者の必要条件であり(渥美,2011)、必ずしも研究成果の追求を第一義としない現場での当事者との実践活動である。しかし、それをもとにして初めて、現場の改善に向けた当事者との実践的研究(アクションリサーチ)が成立する。そこで、以下の流れで研究を実施していった。

(1) 複数の被災コミュニティにおいて地域資源に着目した協働的实践を継続し、復興課題を抽出する。

具体的には、研究代表者らが、発災当初から実践と研究を行ってきた岩手県野田村、宮城県南三陸町、宮城県気仙沼市において、地域資源(NPO,学校、宗教施設)に注目した協働的实践を丹念に行い、各コミュニティの復興課題を抽出する。それぞれ野田チーム、南三陸チーム、気仙沼チームと称して、それぞれ独自に協働的实践を展開しつつ、随時、研究・実践に関する成果や課題を共有する場を設ける。

(2) 理論的整理を経て、各コミュニティの復興課題の解決を目指すアクションリサーチを展開する。

具体的には、グループ・ダイナミックス、教育社会学、宗教社会学の知見、関連分野(例:進化生物学)の知見を融合し、ソーシャルキャピタルを創出する源泉としての地域資源の連携とコミュニティ復興に関する理論の精緻化をそれぞれに、また、合同で図って、各コミュニティの復興課題の解決に向けてアクションリサーチを展開する。

(3) 成果を集約し、コミュニティ復興に向けた地域資源のプラットフォームの構築に関する実践的提言を導出し、モデル地区で試

行する。

災害からの地域コミュニティの復興に向けて、地域資源の機能的な配置・投入を実現するプラットフォームを構築することについて、具体的で実行可能な提言を行い、モデル地区を選定し(次章、研究成果を参照)、広く社会に発信して、今後の災害に備える。

(4)総合的な成果として、利他主義・利他社会をキーワードとした教育プログラムを開発し、教育実践を展開する。

地域資源のプラットフォーム構想の底流にある利他主義・利他社会の概念をもとに、地縁、社縁、血縁が希薄になる現代的なコミュニティのあり方、災害に強い社会の仕組み作りへと提言を深め、利他主義をキーワードとした教育プログラムの開発も行き、教育実践を展開する。

4. 研究成果

(1)岩手県野田村、宮城県南三陸町(歌津地区・志津川地区)、宮城県気仙沼市において、地域資源(NPO,学校、宗教施設)に注目した協働的实践を丹念に行い、各コミュニティの復興課題を抽出した。

野田チーム

野田チームでは、認定特定非営利活動法人日本災害救援ボランティアネットワーク(兵庫県西宮市)を構成員の1つとする現地の災害ボランティアのネットワーク組織「チーム北リアス」を拠点として、地域の既存の諸組織や多様な住民との協働的实践を行った。例えば、津波で流された写真を拾い集めて、洗浄し、整理集約して展示し、持ち主に返却するという活動が行われている。その実施を手伝ったり、活動方法の改善に関する協議の場への出席したりして実践を積み重ねるとともに、その活動が地域への誇りの喪失という復興課題に対し、地域への誇りを取り戻す活動の1つになっていることを考察した。また、被災地で活性化しつつあったコミュニティFM「のだむラジヲ」の開設準備会の結成、運営、記録などに携わるといった協働的实践を通して、地域の諸団体(地域資源)の相互連携が復興課題になっていることを把握し、ラジヲ番組制作を通して、相互に連携する場を構築していった。こうした協働的实践の一端は、エスノグラフィー(渥美, 2014)や国際学術雑誌に英文論文(Atsumi, Ishizuka, & Miyamae, 2016)として公刊した。

南三陸チーム

南三陸チームでは、教育社会学的な視点から、被災後の学校に注目し、当初は同町内の歌津地区、そして、志津川地区の学校にて学習支援などの協働的实践を継続した。志津川小学校は、避難所として多様な問題を抱えながらも、全避難者の安全と安心に向けた組織

運営が行われていた。南三陸チームでは、避難所生活に関する詳細な聞き取り調査を集中的に行い、その成果をまとめて書籍(志津川小学校避難所自治会記録保存プロジェクト実行委員会・志水, 2017)を出版した。

気仙沼チーム

気仙沼チームでは、宗教社会学的な視点から、被災地の宗教施設に注目し、宗教施設による被災者支援活動を精査した。例えば、避難所となっていた寺院青龍寺はその1つであり、聞き取り調査は、災害公営住宅での追跡聞き取りへと繋がる長期的な調査となった。その結果、宗教施設が災害時における避難所として機能したことを明らかにした。

復興については、気仙沼市の神社(本吉町外尾・八幡神社、唐桑町竹の袖・賀茂神社、新町・北野神社)を訪問し、各神社の宮司に地域の復興状況と神社との関わりについて聞き取りを行った。また、実践としては、地元および過去の被災地を芸術で結ぶという協働的实践を展開した。具体的には、地域の画家による津波の絵画と、阪神・淡路大震災以来、災厄に苦しむ人々を悼む楽曲(上田益作曲、レクイエム)の合唱を被災各地で実践してきた合唱団との共催によって絵画と音楽とのコンサートを開催した。また、鎮魂・復興支援イベント「コンポジウム気仙沼2017」なども開催した。その結果、宗教施設を巡る活動には、復興時における地域の象徴として人々の関心を集める機能があり、そこで多様な活動を推進することが復興していく地域に活力を与えうることが明らかになった。成果を稲場(2016)などとして公刊した。

(2)理論的整理を経て、各コミュニティの復興課題の解決を目指すアクションリサーチを展開した。当初は、グループ・ダイナミックス、教育社会学、宗教社会学の知見、関連分野(例:進化生物学)の知見を融合し、ソーシャルキャピタルを創出する源泉としての地域資源の連携とコミュニティ復興に関する理論の精緻化を図って、各コミュニティの復興課題の解決に向けてアクションリサーチを展開するとしていたが、不定期に行ってきた理論研究会は、定期開催できず、不定期断続的な開催となった。その結果、理論的整理で進捗をみたのは野田チームにおけるグループ・ダイナミックスの観点からのものであり、このことは(3)のプラットフォームのモデル地区、(4)の教育プログラムへと繋がった。

野田チームでは、復興課題として、高台移転、学習環境整備、伝統行事の維持などが挙げられており、協働的实践として関与し続けていった。アクションリサーチとしては、2004年中越地震、2007年中越沖地震の被災者が野田村を訪問するという復讐の機会を体験したことから、他の災害への支援を行うことが模索される状況にあった。ちょうど、

気仙沼チーム、南三陸チームからは、「他の地域を助けることができたときに初めて復興したという実感を持つ」という被災者の言葉も印象的に聞こえてきていた。そこで、過去の被災地が現在の被災地に対して救援活動を展開する場面を社会学、進化生物学などの知見を整理して、「被災地のリレー」として概念化し、アクションリサーチを試みた。その結果、2016年熊本地震では野田村から熊本県の被災地への救援が行われリレーが繋がった。こうした実践的研究と理論研究をもとに、コンピュータシミュレーションも使いながら、被災地のリレーのダイナミクスについて検討したところ、被災経験およびその際にボランティアに助けってもらったかどうかといった要因が、リレーを引き起こすことが明らかとなった (Daimon & Atsumi, 2017)。

(3) ここまでの成果を集約し、コミュニティ復興に向けた地域資源のプラットフォームの構築に関する実践的提言を導出し、野田村をモデル地区として試行した。具体的には、コミュニティFMラジオ局を開設することを目的として成立していた「のだむラジオ開局準備会」を災害からの地域コミュニティの復興に向けて、地域資源の機能的な配置・投入を実現するプラットフォームと位置づけてアクションリサーチを展開していった。まず、番組制作を通じた地元の団体間の連携構築などを協働の実践として行い、続いて、ニュースレターの発行を定期化し、地元の小中学校および高等学校、商工会青年部や商店会、役場など諸団体と連携してイベントを開いたり、地域の祭りでの実験的な放送を行ったりして協働の実践を継続していった。こうして収録された番組を用いて、アーカイブを構築していき、復興過程で役立てることを目標としたアクションリサーチへとつなげていった。

(4) 総合的な成果として、利他主義・利他社会をキーワードとした教育プログラムを開発し、教育実践を展開した。具体的には、前項(3)で設定したアクションリサーチを実施した。その際、コミュニティラジオを「復興ラジオ」と位置づけ、電波による送信ではなく、制作された番組のアーカイブに注目した。具体的には、野田村で活動する諸団体の活動や経験を紹介する番組、および、津波で被災した体験談や被災から復興に向けて邁進してきた経験を振り返る番組を制作し、録音を残してアーカイブとした。アクションリサーチでは、まずアーカイブ素材(ラジオ番組)について、制作に関わった住民による会合を開いて語りを収集した。その結果、「さらに機会を得て活動を紹介したい」、「野田村の他の団体の活動を知ることができた(もっと知りたい)」といった声が多数聞かれ、興味関心によって結成していた団体での活動を

番組を通して紹介することによって、復興過程にある野田村へのアイデンティティやプライドが醸成されていることが明らかになった。次に、アーカイブされた番組を地元の野田村立野田小学校の6年生が聴き、そこからヒントを得て、番組出演者やその周辺の人たちに訪問インタビューを行って卒業プレゼンテーションを行った。研究期間内には1学年しか実施できず、番組数も少なかったので、その成果、評価については十分にできなかったが、学校関係者には地元野田村への愛着を高めるという面で好評であったので、研究期間終了後も継続的に行うこととした。これらのことから、コミュニティFMラジオにおける番組制作、その成果として生まれるアーカイブを地域資源プラットフォームとして確立していくことが復興過程に及ぼす効果が確認されつつあるというところまでが、本研究のモデル地区での成果であるが、この点については、さらに今後の復興過程へとつなげていって、その経緯と成果を公刊していく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 61 件)

Daimon, H., & Atsumi, T. (2018). Simulating disaster volunteerism in Japan: "Pay It Forward" as a strategy for extending the post-disaster altruistic community. *Natural Hazards*, 査読有
DOI 10.1007/s11069-018-30309-9.

宮前良平・渥美公秀(2018). 被災写真による「語りえないこと」の回復 実験社会心理学研究 査読有
DOI 10.2130/jjesp.1711.

渥美公秀(2017). 災害ボランティア論の再構築に向けて 災害と共生, 1, 3-7. 査読有
DOI 10.18910/67183

Daimon, H., & Atsumi, T. (2017). "Pay it forward" and Altruistic Responses to Disasters in Japan: Latent Class Analysis of Support Following the 2011 Tohoku Earthquake. *Voluntas* 査読有
DOI 10.1007/s11266-017-9880-y.

稲場圭信(2017) 宗教社会学における災害ボランティア研究の構築 災害と共生, 1, 1, 9-13. 査読有
DOI : <https://doi.org/10.18910/67184>

宮前良平・渥美公秀(2017). 被災写真返却活動における第2の喪失についての実践研究 実験社会心理学研究,56(2),122-136. 査読有

Atsumi, T., Ishizuka, Y., & Miyamae, R. (2016) Collective Tools for Disaster Recovery from the Great East Japan Earthquake and Tsunami: Recalling Community Pride and Memory through Community Radio and "Picturescue" in Noda Village, Iwate Prefecture, Journal of Integrated Disaster Risk Management, 6(2), 1-11, 査読有
DOI10.5595/idrm.2016.0183

大門大朗・渥美公秀(2016). 災害時の利他行動に関する基礎的シミュレーション研究: 1995年と2011年のボランティアでは何が違ったのか 実験社会心理学研究, 55(2), 88-100. 査読有

関嘉寛(2016). 東日本大震災における復興とボランティア フォーラム現代社会学, 15, 92-105. 査読無

Atsumi, T. (2014). Relaying support in disaster-affected areas: The Social implications of a "Pay-it-forward". Disasters, 38(s2), 144-156. 査読有

Atsumi, T., & Goltz, J.D. (2014). Fifteen Years of Disaster Volunteers in Japan: A Longitudinal Fieldwork Assessment of a Disaster Non-Profit Organization. International Journal of Mass Emergencies and Disasters, 32(1), 220-240. 査読有

黒崎浩行・稲場圭信(2013). 宗教者災害救援マップの構築過程と今後の課題 宗教と社会貢献, 3, 65-74. 査読無

〔学会発表〕(計 25 件)

Atsumi, T. (2018). 7 Years in Noda Village: Collaborative Practice, Action Research, & Education. Public Seminar, Disaster Research Center 米国デラウェア大学

渥美公秀(2017) 野田村での長期的なアクションリサーチ~のだむラジヲとコミュニティラーニング 日本グループ・ダイナミックス学会 東京大学

稲場圭信(2017). 宗教と新たなつながりの創出 - 防災・見守り・観光 - 日本宗教学会第76回学術大会 東京大学

Seki, Y. (2017). Recovery from the Great East Japan Earthquake: The Sufferers are Divided into Various Dimension. Mobile Culture of Disaster Conference. Sydney, Australia

稲場圭信(2016). 復興におけるエージェント間の共生と葛藤 - 宗教者の関わりから - 日本宗教学会 早稲田大学

Atsumi, T., Ishizuka, Y., & Miyamae, R. (2015). Collective Tools for Disaster Recovery: Recalling Communal Pride and Memory through Community Radio and "PICTURESCUE" IDRIM Conference, New Delhi, India

関嘉寛(2015). 東日本大震災における復興とは: 中心と周辺の関係から考える 第66回関西社会学会大会 立命館大学

Atsumi, T. (2014). Roles of "Things" in the Process of Recovery from the Great East Japan Earthquake and Tsunami. The 74th Annual Meeting of the Society for Applied Anthropology. Albuquerque, USA.

Atsumi, T. (2014). Collaborative Practice and Action Research toward Recovery from the 3.11 Earthquake and Tsunami: Survivors Centered Approach with Disaster Volunteers at Team North Rias. The 5th Conference of Integrated Disaster Risk Management. Ontario, Canada.

Inaba, K. (2013). Support Activities by People of Faith after the Great East Japan Earthquake. International Society for the Sociology of Religion Conference. Turku, Finland.

〔図書〕(計 20 件)

志津川小学校避難所自治会記録保存プロジェクト実行委員会・志水宏吉(2017) 南三陸発! 志津川小学校避難所-59 日間の物語 明石書店 340ページ

李永俊・渥美公秀 監修(2014, 2015, 2016) 東日本大震災からの復興(1)(2)(3) 弘前大学出版会, 2016年 245, 222, 282ページ

宗教者災害支援連絡会(編集), 蓑輪顕量, 稲場圭信, 黒崎浩行, 葛西賢太(責任編集)(2016). 『災害支援ハンドブック: 宗教者の実践とその協働』春秋社

渥美公秀 pp.17-22

稲場圭信 pp.3-14, pp.155-169, pp.207-216, pp.217-223

Collins, A., Jones, S., Manyena, B., & Jayawickrama, J. (Eds.) (2015). Hazards, Risks, and Disasters in Society. Atsumi, T. pp.19-32.

渥美公秀(2014). 災害ボランティア 弘文堂 285

稲場圭信・黒崎浩行(編著) 震災復興と宗教 明石書店 316

6. 研究組織

(1) 研究代表者

渥美 公秀 (ATSUMI, Tomohide)
大阪大学・大学院人間科学研究科・教授
研究者番号：80260644

(2) 研究分担者

関 嘉寛 (SEKI, Yoshihiro)
関西学院大学・社会学部・教授
研究者番号：30314347

稲場圭信 (INABA, Keishin)
大阪大学・大学院人間科学研究科・教授
研究者番号：30362750

志水宏吉 (SHIMIZU, Kokichi)
大阪大学・大学院人間科学研究科・教授
研究者番号：40196514

黒崎浩行 (KUROSAKI, Hiroyuki)
國學院大學・神道文化学部・教授
研究者番号：70296789

高田一宏 (TAKADA, Kazuhiro)
大阪大学・大学院人間科学研究科・教授
研究者番号：80273564

鈴木勇 (SUZUKI, Isamu)
大阪成蹊大学・教育学部・准教授
研究者番号：90452383

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()